第3種郵便物認可 朝日新聞 2021年（令和3年）5月8日（土） 13版Ｓ オピニオン 10

声 Voice

オピニオン＆フォーラム

みんなで語ろう

続・私の再出発

職場を転々　希望の音楽短大に

薬剤師　山藤　法子（島根県　74）

薬科大を卒業して大手の製薬会社に入社したが、自分には合わないような気がして2年半でやめた。次に父の友人が紹介してくれた薬問屋に入ったが、上司と合わず3日目にやめた。その後、いくつも勤め先を変えたが長続きしなかった。「薬剤師は私には合っていない」と思い、子供の頃から行きたかった音楽大への進学を目指し、38歳で大阪の音楽大の短大部に入学した。再出発だ。こんな性格なので途中でやめてしまうことになるのではと不安だった。

大阪に向かう朝、父は「駅まで送ろう」と言った。しかし老いた両親を島根に残し、好き勝手なことをする自分が親不孝者に思え「いいよ。1人で行く」と言って家を出た。駅のホームで列車を待っていると、近くの草むらに両親がいた。私の方を見て「ばんざい」と腕を上げ下げしている。まるで戦地に行く息子を送り出すように見えた。「どんなことがあっても卒業せねば」と思った。

卒業して実家に戻り家業の薬局を手伝いながら、子供らにピアノを教えた。演奏活動もするようになり、私の「ふらふら生活」は終わった。

夫が突然死　生徒に支えられた

会計年度任用職員　吉井　和美（三重県　59）

12年前、高校教員だった夫が出張先で倒れ、3日後に亡くなりました。まさに青天のへきれきでした。

後には私と夫の両親、大学4年と高校3年の2人の息子が残されました。義父には持病がありましたが、気丈に振る舞ってくれました。義母は落胆して涙もろくなりました。

私は夫と同じ高校に勤めていました。これからは私が家族を支えなければと必死でしたが、つらさに耐えきれず退職しました。地元で仕事を探しましたが、40代後半の女性には簡単には見つかりませんでした。

そんなとき、特別支援学校に勤める知人の先生が、病気で休んでいる先生の代わりにと声をかけてくれました。障がいのある生徒に寄り添うのは初めてでしたが、挑戦することにしました。毎日が実習でした。生徒とのふれ合いや、先生方の生徒への情熱にふれることで、私は徐々に元気を取り戻すことができました。

息子たちは自分たちのことよりも私のことが心配だったようですが、楽しそうな私の姿を見て安心したようでした。支えになってくださった皆さんに感謝しています。

失敗から立ち直った上司の一言

介護施設職員　福原　正義（兵庫県　58）

老人ホームの職員として約30年間、働いてきましたが、2015年の年明け、仕事で失敗して私には厳しい1年のスタートとなりました。

失敗は、行政の手続きに関するものでペナルティーが伴いました。発覚後、上司の指示のもと通常の業務をしながら休日に失敗について点検し、書類を作成し、原因を調べる作業を約1年間続けました。最後には私は自分がすべて否定されたような気になり職場を休みました。自宅にいると世間の目が怖くて日中、外出できなくなりました。

以前に読んだ本に、母親が社会人になる娘に教える場面で、「社会は意外と失敗の原因は探さない。失敗をとがめ、罰を与えるだけだ」と話していたのを思い出しました。

そんな時、上司が自宅を訪ねてきて「福原さん働きましょう。原因は仕事を任せきりで点検する者がいなかったからですよ」と言ってくれました。驚いたのと同時にうれしさがこみ上げてきました。翌日から出勤し、約2カ月間、汗をかく作業にあたり、身も心もすっきりして、元の仕事に復帰しました。

突然の結核　偏見乗り越え結婚

無職　北川　幸二（京都府　80）

大阪の会社に勤めていた23歳の時、得意先への訪問を終えて外に出ると、突然、胃液が逆流して血の混じった真っ赤なつばを吐き出した。

体に違和感を覚え、恐怖感につつまれた。近くの医院を探して飛び込むと、「肺結核」と思いもかけない病気を告げられて、ぼうぜんとなった。会社の寮に戻り、寝込んだ。

目が覚めると母がいた。寮のおばさんが金沢市の実家に連絡してくれたようだった。母とともに実家に帰り、その夜、療養所に入所した。

かつて結核は「国民病」と呼ばれて恐れられていた。死と背中合わせの不安な日々が待っているという意識が私にはあった。療養所ではつらい化学療法が続いたが、幸い2年間で退所することができた。

通院治療を続けながら元の職場へも復帰した。だが当時は病気への偏見があり、医者からも「結婚は考えないように」と言われていた。我が身の人生の哀れさを感じたのだが、幸い知人の紹介で30歳の時に妻と知り合った。結婚した後、思い切って結核のことを打ち明けると、妻は意に介さず淡々と受け止めてくれた。

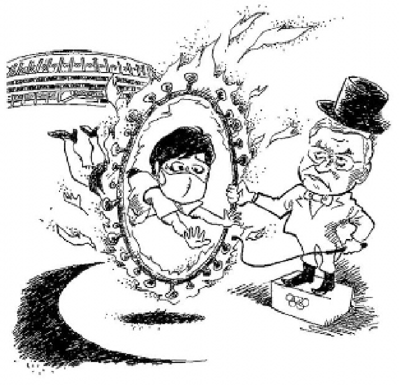
いじめの過去　成人式で晴れる

会社員　三好　雄大（大阪府　26）

クラスでいじめられていた中学生のころの私にとって、学校はまさに地獄だった。私のことを誰も知らない環境に身を置きたくて、高校は遠方の学校に進学し、大学時代はさらに遠い町でひとりで暮らした。そんなある日、成人式の案内状が届いた。参加すれば再び過去と向き合わなければならないが、友人の誘いもあり、参加することにした。

成人式の当日、私をいじめていた同級生たちを見かけた。心が締めつけられるような思いだった。

「久しぶり、元気か？」「今は何してるんや」。彼らは何事もなかったように私に話しかけてきた。その接し方が悔しかった。私にとっては世界の終わりのように感じていた当時の出来事も、彼らにとってはたわいのない日常だったのだ。だが、同時に何か拍子抜けした感じがした。その程度のことで悩んでいたのかとばからしく思い、心が軽くなった。中学時代もつらいことばかりではなかったはずなのに、全てを否定していた。成人式に参加して、過去の私を肯定することができた。少しだけ前を向けた。



ビゴー画伯（1860―1927）は今の日本の立場をどのように描いたろうか　やく　みつる

高校への通学路　感謝と共に歩く

高校生　石原　元（千葉県　15）

学校に行けなくなったのは小学2年の時だった。行ける日と行けない日があった。母親に泣きながら校長室に連れて行かれたこともあった。

自分はすごく行きたかった。友達に会ったり、勉強したりしたかった。でも体が動かない。行きたい自分を強制的に止めてくる。このつらさを周りに話しても「甘えだ」とか否定的な反応だった。

小3のころ、校外のカウンセラーの先生から「あなたは多分、義務教育はつらいけど、高校や大学に入ったら自分らしく生きられると思う」と言われた。意味がよく分からなかったが、胸に残った。

中学からは学校復帰をめざす適応指導教室に入った。担当の先生の言葉が忘れられない。「中学という枠にとらわれずに、のびのびと進路選択をしなさい」。中学に行けなければ高校進学は難しいと感じていた自分は、足かせが外れたような気がした。

4月、教室通学もできる通信制高校に進学した。自分の好きな英語の授業が豊富にある。振り返ると、いろんな先生に支えていただいた。その感謝を胸に私は通学路を歩む。

「帰り待っとっとよ」と言う夫と

薬剤師　渕　政子（長崎県　67）

3月末で、調剤薬局の仕事を離れた。70歳まで働こうと思っていたが、週4日のフルタイムがきつくなってきたのと、夫がぽつんともらした言葉が気になっていたからだ。

「家で留守番をしながら、あなたの帰りを待っとっとよ」

夫が現役の頃は、午前6時前から夫婦2人分の弁当を作った。夫は7時前に出勤。私も片付けを済ませて出勤。互いに帰宅も遅く、会話もあまりないような生活だった。2年前に夫は退職したが、私は忙しいままだった。

4月1日、台所に立ちながら、時計を見る回数が減ったように感じた。自由の身になったんだ。朝寝坊もできるが、体は正直。5時過ぎに目が覚める。朝食後は散歩。帰宅後、朝刊をじっくり読み、掃除、スーパーで買い物、そして家庭菜園の世話や読書。時間を気にせず本を読める。

夫も安心したらしく、朝食中に「昼ご飯は何かな？」。この人、食べることしか頭にないのだろうかとあきれつつ、あと何年一緒に暮らせるかもわからないので、神様が与えてくださる残りの時間を大切に過ごしていきたいと思う。

元気なうちに　選んだ新しい「家」

無職　谷本　公子（埼玉県　84）

昨年秋、私たち夫婦は自立型有料老人ホームに入居しました。私84歳、夫87歳。2人とも精神的にも身体的にも元気ですが、高齢になったことは現実です。自分たちで物事を考え、企画し、決定して行動できるうちに、残りの人生設計を立てることにしました。

近くに住む娘と家族は、老いた私たち夫婦に大変よくしてくれますが、その関係を長く保つためにも、ほどよい距離が必要と思いました。

住み慣れた家からの別れは感慨深いものがありました。結婚して60年余り。2人で歩み、築いてきた道があったからこそ、人生の再出発をすることができました。

春を迎え、施設の5階の部屋から満開の桜があちらこちらに見えました。折々に見た桜はいろいろありますが、今年の桜花は新しい生活を始めた私たちに穏やかな時をと、話しかけてくれているようでした。

秋から冬にかけての晴れた日は富士山が見えます。夕日が富士山に隠れる直前、一瞬輝きを増します。私も人生の終わりに何か光るものを見つけたい。探し求めています。

社説 Editorials

緊急事態延長

迷走生んだ甘い見通し

緊急事態宣言の今月31日までの延長が決まった。愛知、福岡が加わって対象は6都府県に。まん延防止等重点措置も5県で継続のうえ、新たに北海道、岐阜、三重に適用される。

重症者の数は連日のように最多を更新し、中でも関西地区は深刻の度を深めている。一般医療に携わる者も含めて現場の負担を少しでも軽くし、救える命を確実に救うために、やむを得ない延長・拡大といえよう。

そもそも大型連休を挟む17日間という当初の設定に、感染症の専門家からは、短すぎるし、施策の効果を見極めることもできないとの指摘が出ていた。だが政府は耳を傾けず、「短期集中」ともっともらしい看板を掲げた。甘い見通しとその破綻（はたん）は、政治への信頼をさらに傷つける結果となった。

とりわけ休業や営業時間の短縮を求められた多くの事業者にすれば、短距離走だと言われて歯を食いしばって応じたのに、間際になってゴールを動かされたような思いだろう。丁寧な説明と手厚い支援が必要だ。

まさかその「支援」のつもりではないだろうが、延長と抱き合わせる形で、休業要請などを一部緩和したことには疑問を拭えない。最終的には知事の判断になるが、アクセルとブレーキを同時に踏むようなことをすれば、どんなメッセージとなって伝わるか。Ｇｏ Ｔｏ事業を巡る中途半端な対応が、傷を深くした過去を思い起こすべきだ。

感染力の強い変異株への置き換わりが各地で進み、インドで流行する別の株も国内で見つかっている。不安は増すばかりなのに、首相は「人の流れは間違いなく減少している」と繰り返し、自らの政策の正当性をアピールする。責任回避にしか見えないその振る舞いが、首相の言葉が国民に届かない大きな原因になっていることに気づかないのだろうか。

折に触れ「専門家の意見を聴いて」というが、「17日間」が示すように実を伴っていないのも問題だ。きのう政府の諮問を受けた専門家らからは、宣言を解除する基準を厳しくして、感染抑止に注力すべきだとの意見が相次いだ。耳の痛い提言にも謙虚に向き合わねば、この苦境を脱することはできまい。

1年余に及ぶ自粛疲れ・宣言慣れというべき状況に、ワクチン接種が進まないストレスも加わって社会を閉塞（へいそく）感が覆う。

目標をしっかり掲げ、そこに至る道筋を理由とともに説く。対話から逃げず、過ちや見立て違いがあれば素直に認め、原因を分析して次の対策に生かす。国民の協力が得られないと嘆くのではなく、得られるように力を尽くすのが政治の使命だ。

2021・5・8

赤木ファイル

黒塗りで事実を隠すな

文書の存否すら明かさなかった不誠実な態度をようやく改め、開示に応じるというが、「黒塗り」で真相解明を阻むことがあってはならない。

森友学園への国有地売却をめぐる財務省の公文書改ざんで、国が「赤木ファイル」の存在を認めた。改ざんに加担させられたことを苦に自死した元近畿財務局職員、赤木俊夫さんが、一連の経緯を記録したもので、妻の雅子さんが国などに損害賠償を請求している裁判で提出を求めていた。

提訴から1年余り。俊夫さんの元上司がファイルの存在について語った音声データが裁判所に出されてからでも、半年が経過している。この間、財務省は、法廷では「争点とは関係ない」として、国会では「裁判に影響が出る」として、ファイルの公開要求に応じてこなかった。真実の隠蔽（いんぺい）を図ったとしかみえない態度に、改めて怒りを禁じ得ない。

今回の開示表明は、あくまで裁判所に促されてのものだ。財務省はこれまでの後ろ向きな対応を猛省しなければならない。とりわけ、国会で拒否発言を重ねたトップの麻生財務相の責任は重い。

懸念されるのは、内容がどこまで明らかにされるかである。

国が示すとしたのは、俊夫さんが改ざんの経緯を時系列でまとめた資料と、財務省と近畿財務局との間でやりとりされたメールなどだ。俊夫さんが受けた苦痛を判断する手がかりになるだけでなく、改ざんの動機や詳しい指揮命令の実態が明らかになる可能性がある。

財務省は一部をマスキング処理、すなわち黒塗りをした上で開示する考えだ。国有地売却や文書改ざんに直接関係のない第三者らを守ることは必要だが、組織や職員に配慮した恣意（しい）的な判断は許されない。「夫に改ざんを促した人の名前はちゃんと出してほしい」という雅子さんの声に向き合うべきだ。

森友問題では、事実と異なる国会での政府答弁が139回、確認されている。国と森友側とのやりとりの記録について、実際にはあるのに「不存在」として情報公開に応じなかった例も46件明らかになった。

国民が共有すべき情報を公開しないばかりか、うその説明を重ねた政府。特に財務省の隠蔽体質は、民主主義の根幹を揺るがすものだ。

安倍政権は、森友問題の調査を当事者である財務省に担わせ、解明が不十分なまま、関係者の処分で幕引きをした。菅政権もそれを引き継いでいる。赤木ファイルという新たな証拠を契機に、第三者による徹底調査に乗り出すべきだ。

かたえくぼ

家族総出

昔――田植え
今――ワクチン接種予約

（小山・花ちゃん）

朝日川柳　山丘春朗選

2021・5・8

寝て待てぬ果報もあると知る接種　長野県　梶田　卓
古稀過ぎて我先争う自虐劇　岡山県　林　武治
命かけた「遺書」に墨塗る不埒者　埼玉県　小島　福節
☆塗り忘れあってはならぬアとキとエ　山形県　安孫子伸洋
始まれば感動すると侮られ　東京都　三神　玲子
捨てるもの何もないはず天和は　兵庫県　岸田　万彩
新緑というワクチンを浴びに行く　東京都　尾根沢利男

一句、予約至難。二句、やるせなさ。三句、マスキングとか。四句、安倍家の大事と。五句、五輪。六句、中国のロケット残骸落下。七句、せめて、たっぷり。

次回は　みんなで語ろう　ダイエット

コロナ禍で自宅に閉じこもる生活が続き、屋外で体を動かす機会も減りました。それでいてストレスで食べる量は増え……。薄着になる夏が近づいた今、体形や体重が気になる人も多いと思います。「1億総ダイエット」という言葉もあるほどで、約9割の女子高校生が「やせたい」と考えているとの調査結果も。成功談、失敗談などエピソードをお寄せください。

27日必着。6月5日掲載予定です。

■投稿先　〒530・8063
大阪北郵便局私書箱44号
朝日新聞「声」
ＦＡＸ　06・6223・0737
メール　dai-koe@asahi.com
（添付ファイルは不可）

- ▼氏名、電話番号（携帯も）、住所、年齢、職業を明記
- ▼デジタルメディアにも収録します
- ▼趣旨は変えずに直すことがあります
- ▼実名原則。他紙との二重投稿やネット掲載済み文章は不可
- ▼原稿は返却しません

■無断転載を禁止します

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.